

日本篆刻家協会会報

第22号 平成31年4月15日発行
 発行：日本篆刻家協会
 563-0032 池田市石橋2-2-10-203
 TEL 072-760-3852 FAX072-760-3853
 E-mail: info@n-tenkoku.jp
 http://www.n-tenkoku.jp

平成三十一年度総会開催

平成三十一年度総会が一月十三日（日）、石川県山代温泉「瑠璃光」で開催された。今年は例年と違って会場を風光明媚な山代温泉に設定し、全国各地から役員、会員計一六八人が参加した。

総会に先立ち、十一時から理事会が同所で開かれた。



挨拶する尾崎会長

総会は十三時半から、松本雅至常務理事の司会のもと、まず真鍋井蛙副理事長から開会のことばがあり、井谷五雲理事長が議長に選出され進められた。平成三十年度事業報告、同決算報告、同会計監査報告、平成三十一年度事業計画案、同予算案、同役員案が提案され、いずれも原案通り承認された。また、今年は三十五周年記念となる篆刻展、中国、台湾との海外交流行事等の説明が詳しくなされた。会場後方

机上には、第三十四回日本篆刻展での常任委員上位入賞者作品が冊頁にて展覧され、会場に華やかさを添えていた。

総会に引き続き十五時から「真鍋井蛙先生日展特選受賞祝賀会・新年会」が行われた。大村雪陵常務理事の司会進行のもと、井谷五雲理事長が新年のご挨拶と真鍋副理事長へのお祝いの言葉を述べられた。若い頃の楽しいお二人のエピソードや、日展が改組となって五回のうち、二回の特選が日本篆刻家協会を受賞しているという慶事を披露された。その後、渡邊和琴代表理事がお祝いの言葉と花束を贈呈され、真鍋副理事長の謝辞となった。まず御礼を述べられ、箸袋に入

門を書き梅先生の弟子となったことや、『篆美』の課題に出品されていた頃のお話。そして、梅先生が第五回日展で古璽をモチーフとした作品で特選を受賞され、今回ご自分も改組新第五回に古璽印で特選を受賞できたことは、梅先生に助けていただいたようだと感謝された。さらに、夢を与えられる日本篆刻家協会でありたい、篆刻を愛して邁進していきたいと、これからの抱負を力強く話された。

その後、小朴圃代表理事が、昨年八月中央研究会のうちに、真鍋副理事長とお二人で日展に向けてちよつとだけ頑張ろうと約束されたという秘話や、本当に良い作品だから会場では是非見て欲しいとエールを送られ、乾杯となった。

宴もたけなわとなる中、企画委員からの賞品提供で、課題年間優秀者の表彰、新年らしいおみくじ型の福引大会がおこなわれた。さらに改組新第五回日展の初入选者三人、橘高香流・村田祥鳳・吉田雅風氏の披露があった。

最後に、山下方亭常任顧問が、今年度むかえる日本篆刻家協会創立三十五周年記念展の成功と、夏の中央研究会の参加を呼びかけられ、百六十人を超える参加者による加賀山代温泉「瑠璃光」での新年会は、お祝いムードの中、盛大に幕を閉じた。

（関踏青）

総会を進める井谷理事長



新年会・真鍋井蛙先生 日展特選受賞祝賀会



閑理事から花束贈呈



小代表理事の首頭で乾杯



謝辞を述べる真鍋副理事長

平成三十一年のスタートに際して

理事長 井谷五雲

二〇一九年の日本篆刻家協会は一月十三日に石川県山城温泉瑠璃光で開催された新年総会から既に動き出しております。

一月の寒さ厳しい北陸での開催には、参加人数のことを考えると少し勇気のいることでした。しかし、それは杞憂でした。印社代表各位の参加呼びかけが大きく効果があったと思われませんが、例年、大阪の地で開催するのと同じ一七〇人に近い参加者を得たことは、会員諸氏の意気軒高な姿を如実に物語るものと、本当に嬉しく頼もしく思いました。準備から当日の運営までご努力いただきました越思・北枝・北庄の各印社の代表及び会員のみなさんにお礼を申し上げます。来年は静岡県浜松で開催します。美しい浜名湖の近くでの開催で、冬でも穏やかな地です。本年にもまして多くの会員の皆様に参加され、本協会の運営に力を貸していただきたいと思っております。既に代表理事である遠藤豪会の伊藤雅夫先生が事前の準備に万全を期しておられます。心強いかぎりです。

本年は本協会創立三十五周年にあたります。さる三月二十三日・二十四日の両日に第三十五回日本篆刻展の審査が神戸原田の森ギャラリーで行われました。会員数の減少が大きな問題であるのは、日本の書道界全般の問題です。

と言うより、更に日本の芸術文化全般の関心事とも思われます。そして出品数の減少が懸念された三十五回展の審査でしたが、公募出品数は昨年を上回り、全体数も微減であったことで胸をなでおろしております。あとはその開催を待つのみです。一人でも多くの参観者を得て、授賞式・出品者懇親会にも多くの会員が出席くださることを切望いたします。三十五周年ということ、担当者はそれにふさわしいセレモニーであること、楽しく華やかな懇親会であることを念頭にいろいろと趣向を凝らして準備をしているところです。会場は全館借り切り盛大な展覧会になります。特に特別展観は「日本印人」をテーマに会員所蔵の刻印・書・画・器物等を展観します。その数は膨大なものになりそうです。そして記念出版として、この日本印人展を単に開催するだけで終わらせず、研究資料として今後も活用できる図録を現在制作中です。これも期待していただくに十分なものであろうと思われると同時に、担当者のご努力に敬意を表したいと思います。また、山下方亭常任顧問の発案になる本協会の『会員所蔵印譜目録』も鋭意制作中です。

さて、思い返しますに、昨年は海外との交流や国内の他篆刻団体との交流が大変密に行われた一年でした。まず、

平成三十一年度役員

【常任顧問】

山下方亭

【会長】

尾崎蒼石

【理事長】

井谷五雲

【副理事長】

喜多芳邑

【代表理事】

真鍋井蛙

【名譽理事】

伊藤雅夫

【常務理事】

渡邊和琴

【評議員】

小林睦水

【理事】

足立瑠泉

【参事】

御手洗眉山

【参事】

畔原裕美

【参事】

射場少藍

【参事】

大橋安泰

【参事】

木村容庸

【参事】

関踏青

【参事】

戸出九廬

【参事】

早川曉芬

【参事】

本郷紫香

【参事】

山本寿法

【参事】

米田黄苑

【参事】

浅野祥雲

加藤静雲 金谷政治 川久保明 北野河聲

倉野看雨 劔田白峰 小谷知洲 坂上香艸

阪口香雪 佐藤正明 正和杏葉 杉本素月

大我羊 高野弘深 多田学友 田中九成

田中瑞峰 玉村芙蓉 丹下青風 中島大夢

永野草翠 西田茜秋 橋本碧峰 服部九姚

花村秀嶽 林旦山 樋口桃園 藤川曼美恵

藤繩尚子 堀口耕碩 本江惠翠 増田繁治

松阪聖岳 松田泰軒 松竹芳翠 松永六朗

松本弘碩 水上健治 水巻游光 宮野宗雄

村松瓊玉 森豊苑 山崎一雄 葭岡慶石

吉田宗里 若杉彩雲

青木嘉代子 青木雄山 秋山捷華 浅野江涯

浅野春泉 浅野道男 浅野和泉 浅良朱華

新井散葉 池田蘆翠 石川無外 石留之然

伊藤錦汀 伊藤梅香 今村重圃 上松莊夢

内田真弓 宇都宮蘭雪 梅原玉翠 大倉章義

大原誠 岡田桂舟 岡端如繪 小川匪石

尾川雅舟 小國妙子 尾原葉香 柳野麗琴

片畑仁美 加藤正順 川崎白水 川田紅溪

北田成岳 北畑謙之 橘高香流 木本研塵

串田一逕 工藤芳悦 小森香苑 近藤胡蝶

三枝龍泉 嵯峨洛山 靜一華 渋谷春好

嶋田杏園 鈴木紀山 鷹取千豊 巽聖石

立石見聲 田中皋仙 谷桜洲 千蔵天空

千葉晨翠 妻鳥明子 寺田和仁 寺田濤雲

寺本翠葉 土井青雅 得永春水 中野聡

名倉克彦 西岡青淡 西口青咲 野中紫光

島穆風 花房浩佳 原田恵苑 坂正歩

平田征男 廣田佳苑 藤村香代子 藤本蘇西

古瀬章石 細川恵苑 馬景泉 牧野象山

松田静石 松田美津子 松野碧泉 松本清苑

丸山沙舟 萬谷碧鳳 水野和香 南敏子

宮越素翠 村田祥鳳 安井芳泉 山内昂波

山口敦子 山崎井泉 山田青溪 山吹緑

山村千秋 山室雅美 山本恵子 吉田雅風

吉原愛璃 渡邊尚石

三月には日本と台湾の「青年篆刻交流展」が台北の国父記念館で開催され、選抜された日本・台湾それぞれ三十人、計六十人の若手交流展が盛大に開催され、本協会からも七人の出品者が参加し、芸術面においても人的交流面においても大きな成果をあげました。後には東京の新日展会館で日本側の同じメンバーで報告展が開催され、充実した国内の若手交流が行われました。同じ三月に名古屋で行われました「東西篆刻家交流会」にも本協会からは百人以上の参加があり、その交流は意義深いものであります。

八月末から九月にかけては、まず山東省濰坊において陳介祺研究会主催の篆刻芸術節に参加し、公募の部には百人近い会員が出品しました。また日本篆刻家協会展には常務理事以上の先生方の力作が陳列され、また尾崎蒼石会長の個展も開催されました。

その篆刻芸術節に先立つ形で杭州西泠印社では甲骨文字書法展が開催されました。本協会は西泠印社名譽社員を中心に出品し、現地での開幕式には尾崎蒼石会長と私がテレビ取材を受け、放映されました。

十一月には西泠印社創立百十五周年記念行事に参加しました。名譽理事二人、名譽社員八人を要する本協会にとって西泠印社との交流はたいへん重要なものです。中国の解放政策実施後、いち早く訪中団を派遣し

て交流の実を深められてきた初代理事長の梅舒適先生の功績を我々は継承していく義務があるでしょう。西泠印社では本協会の常務理事以上の先生方が出品した国際印社展、並びに十人の名譽理事及び社員が出品した西泠印社社員展が華々しく開催されました。

昨年これら国内外の諸行事に参加されました、特に常務理事以上の先生方にはその労をねぎらいたいと思います。本年も国際交流行事が目白押し状況です。関係の先生方には引き続き何卒よろしくお願いたします。

昨年も同じことを述べましたが、自己の芸術を磨くとともに、本協会の健全な有り様を模索推進することはそんなに簡単なことではありません。そもそも芸事に励むのはいかに趣味的と言っても孤独で厳しいという側面をもっており、その厳しさに謙虚に向かい合って取り組むには仲間や適切な師を必要とするものです。本協会がそれにふさわしい場所であり続けるために、皆さんと断続的努力を惜しまないつもりでおります。印社代表者や協会幹部の先生方と十分に意見交換をしながら、また千人の会員諸氏と十分に意思の疎通を図りながら、力を合わせて本協会の発展と会員諸氏の篆刻活動の進展のために尽力していきたいと考えます。更なる皆さんのご協力をお願いいたします。ご挨拶いたします。



第三十五回日本篆刻展 審査会

「第三十五回日本篆刻展」の審査会が三月二十三日、二十四日の二日間、神戸市の兵庫県立美術館王子分館会議室で行われた。全国から寄せられた参与、評議員、常任委員、委員、会員、公募の作品総数六百六十三点を対象に十八人の審査員が鑑別審査にあたった。慎重かつ厳正な審査の結果、参与から顧問賞一点、同会長賞一点、評議員から梅舒適賞五点、常任委員から日本篆刻展大賞一点、同準大賞六點、同優秀賞二十二点、委員から奨励賞三十七点、会員から特選三十二点、秀作五十五点、公募から会員推薦賞五十八点を選ばれた。今展は第三十五回の記念展でもあり、例年よりもやや多めに入賞者を出す形となった。尚、委員奨励賞から寄託賞二点、会員特選から寄託賞四点を選出された。

作品は五月二十二日から二十六日までの会期で、兵庫県立美術館王子分館（原田の森ギャラリー）にて、特別展観「日本の印人」、「第三回日本篆刻家協会学生展」とともに展覧される。

● 審査委員長 理事長 井谷五雲

● 審査員

常任顧問 山下方亭 会長 尾崎蒼石

副理事長 喜多芳邑 多田龍淵 中島春緑 平田蘭石 真鍋井蛙

代表理事 伊藤雅夫 黒田玉洲 酒屋石荘 小朴圃 渡邊和琴

常務理事 大村雪陵 北室南苑 草田翠苑 中村葉舟 松本雅至

■ 日本篆刻家協会顧問賞・会長賞選考委員

常任顧問・会長・理事長 三人

■ 梅舒適賞選考委員

常任顧問・会長・理事長・副理事長 八人

■ 大賞選考委員（大賞・準大賞・優秀賞）

常任顧問・会長・理事長・副理事長・代表理事 十三人

■ 学生展選考委員

理事長・常務理事 六人

大賞選考にあたる常任顧問・会長・理事長ら



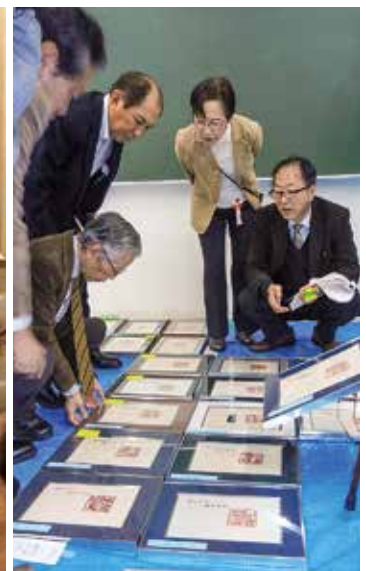
主な受賞者（敬称略）

- ◆日本篆刻家協会顧問賞（参与）
倉野看雨
- ◆日本篆刻家協会会長賞（参与）
植野無人
- ◆梅舒適賞（評議員）
馬景泉 吉田雅風 名倉克彦
北田成磊 嵯峨洛山
- ◆日本篆刻展大賞（常任委員）
鬼頭紅節
- ◆日本篆刻展準大賞（常任委員）
坂田晶子 長尾千雲 松川白遊
山本龍石 仲井祥風 津田秀鳳
- ◆日本篆刻展優秀賞（常任委員）
稲垣竹扇 永井溪舟 立川美津夫
前口紅泉 関由紀夫 榊原有光
栗田慎一郎 岡崎戯石 鈴木惠草
杉原照楓 榎本翠峰 三好和生
福谷華紅 乃村翠琴 戸出紅桃
山崎芳園 橋本游月 中井榮子
森静二 藤本忠義 大山模華
浦岡香之
- ◆最優秀賞（学生展）
西田萌恵子
- ◆優秀賞（学生展）
大村茜音 貴治彩 堀井千織
櫻井潤 今倉穂風 山本宙
大塚咲妃子 能見虹春 井口春香
河内彩夏

字書を手に誤字の確認



審査結果を報告する松本常務理事



慎重に審査

八月課題

「神情朗達」

役員 (酒居石莊選)



燕安



容庸



尚石



章石



天空

常任委員 (奥田晨生選)



博石



六朗



葭舟



紳丘



戲石

委員 (梶川久美子選)



五岳



昌子



悦治



秋鹿



浩二

會員 (梶田稻州選)



杏芽



素風



卿雲



幽篁



菅玉

一般 (北室南苑選)



俊彦



惠子



晶石



知洲



三徳

〔役員〕

○古野燕安 田中九成
○木村容庸 島穆風
○渡邊尚石 水野和香
○古瀬翠石 松野碧泉
○千歳天空 小谷知洲
○宮野宗雄 磯村育治
○畑岡青路 谷桜洲
計五二人

〔常任委員〕

○津田秀風 池谷宝樹
○小澤博石 堂守唯文
○松永六朗 高橋忠義
○平中葭舟 森井昌雲
○奥島紳丘 奥島極浦
○岡崎戯石 奥島極浦
○岡崎戯石 奥島極浦
○北畑謙之 中本管城
○潘定静山 大東亮夷
計四五人

〔委員〕

○渡會俊正 白幡雪峰
○小松五岳 山崎博子
○伊谷昌子 西岡貴美子
○井上秋鹿 川端不條
○岡本浩二 青山正人
○岡本浩二 青山正人
○白幡雪峰 山崎博子
○井畑喜雨 小林邦夫
計四七人

〔會員〕

○山中徹人 河野无喬
○植田杏芽 松本光雄
○鈴木素風 松島青樞
○大井剛雲 池内龍泉
○遠藤幽篁 寺地寿和子
○中本管玉 川崎渥水
○袴田惠理子 矢場鷺雪
計四五人

〔一般〕

○板屋玉芝 小倉俊彦
○三宅洋子 小林媛瑠
○山崎惠子 小林靖武
○須田桃苑 須田桃苑
○須田桃苑 須田桃苑
○久郷三雄 小野倫照
○三徳 楊八哥
○大平正子 馬場閑娟
計二七人

九月課題

「游神」

役員 (小林圃選)



沙舟



碧泉



燕安



敏子



草翠

常任委員 (草田翠苑選)



謙之



惠子



碧風



唯文



榮子

委員 (熊木夕生選)



浩二



黎秀



紀久



勉



乾石

會員 (黃平齋選)



玉雲



徹人



龍泉



好昭



哲幸

一般 (田中修文選)



晶石



佳苑



惠子



純子



正子

〔役員〕

○木村容庸 名倉亮彦
○丸山沙舟 立石賢登
○古野碧泉 山崎一雄
○南敏子 多田友友
○古野翠翠 川久保明
○片畑仁美 安井芳盛
○浅野道男 島穆風
計五三人

〔常任委員〕

○中島敬次 奥島極浦
○北畑謙之 小澤博石
○古野翠翠 萬谷碧風
○南敏子 平中葭舟
○堂守唯文 津田秀風
○中井榮子 月森康生
○山崎白遊 森靜二
○山崎井泉 高橋忠義
計四七人

〔委員〕

○白幡雪峰 兼子悦治
○岡本浩二 伊谷昌子
○武田黎秀 井上秋鹿
○中村紀久 西岡貴美子
○永田乾石 西岡龍生
○矢持秀峰 鈴木真壽男
○前田筋屋 伊藤光屋
計四八人

〔會員〕

○明石精 尾崎幸庵
○上田玉雲 袴田惠理子
○山田徹人 向井輝雄
○池内龍泉 遠藤幽篁
○木田好昭 須田純子
○吉田哲幸 相川良孝
○壹岐照美 松島青樞
○伊藤光屋 寺地寿和子
計四一人

〔一般〕

○佐野真哉美 後藤知洲
○誤羅石 三宅洋子
○山崎惠子 國江碧翠
○新田純子 広森勝竹
○大平正子 石田幹石
○小倉俊彦 片岡瑞峰
○牛島鈴輪 楊八哥
計二八人

十月課題 「德不孤」

役員(渡邊和琴選)



吳山



燕安



仁美



宗雄



游光

常任委員(堤白遊選)



六朗



敬次



井泉



博石



翠龍

委員(中村葉舟選)



溪白



春壽



貞壽男



劉石



勝山

會員(長谷川帰海選)



輝雄



登志美



龍泉



光崖



管玉

一般(長谷川拓石選)



惠子



真咲美



俊彦



知洲



溪州

役員(安井芳泉)

常任委員(鈴木惠草)

委員(岡本浩一)

會員(馬場閑蜻)

一般(池田泥異選)

役員(青木雄山)

常任委員(奥島隆浦)

委員(武田黎秀)

會員(池内龍泉)

一般(馬場閑蜻)

役員(山下方亭選)

常任委員(古溝幽畦選)

委員(松本雅至選)

十一月課題 「墨戲」

役員(山下方亭選)



繁治



吳山



明峯



容庸



杏葉

常任委員(古溝幽畦選)



葭舟



井泉



華紅



惠草



管城

委員(松本雅至選)



啓志



正人



遼華



五岳



悅治

會員(御手洗眉山選)



美舟



惠理子



杏芽



正義



幽篁

一般(池田泥異選)



俊彦



惠子



鈴輪



正子



真咲美

役員(青木雄山)

常任委員(奥島隆浦)

委員(武田黎秀)

會員(池内龍泉)

一般(馬場閑蜻)

役員(山下方亭選)

常任委員(古溝幽畦選)

「爲而不恃」

役員(尾崎蒼石選)



浩佳



桂舟



慶石



白水



容甫

常任委員(伊佐治祥雲選)



翠龍



玉峯



畦石



紳丘



秀風

委員(石原豊玉選)



昌子



黄瑞



悦治



英昭



桃華

會員(出田塘葭選)



和彦



哲幸



禎水



良孝



徹人

一般(大村雪陵選)



惠子



蘇晨



鈴輪



蒼山



朴園

- 【役員】 谷板洲
 ○花房浩佳 水巻游光
 ○岡田桂舟 寺田和仁
 ○飯岡慶石 片畑仁美
 ○川崎白水 高野弘深
 ○木村容甫 多田学友
 今村重國 岩田耕畑
 古野燕安 千歳天空
 計四七人
- 【常任委員】 音川景香
 ○佐藤翠龍 番定静山
 ○伊谷昌子 西岡真美子
 ○堤黄瑞 岡本浩一
 ○兼子悦治 大崎深白
 ○小林英昭 山崎游石
 ○中野桃華 井上秋鹿
 ○武田黎秀 浦田黎雲
 小松五岳 井畑喜雨
 計四三人
- 【委員】 西岡真美子
 ○山崎正人 青岡真志
 ○服部和彦 尾畑翠庵
 ○吉田哲幸 松村信夫
 ○川崎禎水 袴田恵理子
 ○相川良孝 遠藤幽室
 ○山中徹人 池内龍泉
 ○伊藤光崖 鈴木素風
 成瀬登夫 上田玉雲
 計三七人
- 【一般】 佐野暎美
 ○山崎惠子 小林媛瑤
 ○川野蘇晨 木村志男
 ○牛島鈴輪 石田幹石
 ○川尻蒼山 大平正子
 ○城本朴園 楊八哥
 ○石場濱州 小倉俊彦
 大登恵子 広森勝竹
 計四二人

「無疆」

役員(井谷五雲選)



尚石



春好



和人



祥風



草翠

常任委員(奥田晨生選)



管城



秀風



戲石



容史子



惠草

委員(梶川久美子選)



勝山



五岳



智子



貴美子



悦治

會員(梶田稻州選)



幽篁



杏芽



光崖



真咲美



素風

- 【役員】 丸山沙舟
 ○渡邊尚石 岡田桂舟
 ○渡谷春好 安井芳泉
 ○寺田和人 松永吉朗
 ○村田祥風 片畑仁美
 ○永野草堂 花房浩佳
 正和杏葉 木村容甫
 山村千秋 名倉克彦
 計六〇人
- 【常任委員】 向畑芳翠
 ○中本管城 奥島楳浦
 ○津田秀風 田中紅珠
 ○岡崎戲石 青山正人
 ○大城容史子 安西幸恵
 ○鈴木惠草 川栄玉峯
 永田乾石 福谷華紅
 森静一 白幡雪峰
 計四八人
- 【委員】 堤黄瑞
 ○天野勝山 伊谷昌子
 ○小松五岳 高木啓志
 ○山本智子 三宅深月
 ○兼子悦治 渡會俊正
 ○西岡真美子 藤田勉
 ○伊藤光崖 岩田秀裕
 ○佐野暎美 上田玉雲
 ○鈴木素風 中本管玉
 吉田哲幸 内田美代子
 浅井千賀子 明石精
 計四五人

東西篆刻交流会

二月二十四日(日)午後一時から銀座フェニックスプラザ、フェニックスホールにて全日本篆刻連盟、扶桑印社、日本篆刻家協会の三団体連合による「東西篆刻交流会」が開催された。日展理事新井光風先生を講師に招き、「戦国秦簡字形考」と題した講演が行われ、そのあとクルーズクルーズ THE GINZA にて立食形式の懇親会が開かれた。

交流会に先立ち、去年に引き続き前日祭として各篆刻団体から若手が自主的に集まり、勉強会を実施した。月島区民館にて二三日(土)午後一時三〇分より「趙之謙へのオマージュ」と題して始まり、始めに連盟の山本晃一氏より「河野先生の趙之謙観」のテーマで講話をして頂いた。展観として河野先生の所蔵品、印譜、書籍など観賞し中でも圧巻だったのは河野先生の篆書作品で趙之謙の書法を見事に昇華させた作品で一同唸らされた。聞けば六幅からなる作品は一夜にして書き上げられたとのことだ。迷いのない筆法は卓絶であった。山本氏の見解では趙之謙の右上がりの癖を河野先生は水平に直されていて、詳細な観察の様子が見て取れる。

講話の後、実作。オマージュというところで事前準備を告げられていたが私は印稿だけ用意していた。その場の雰囲気や刀がどう進むか、実験のつもりだった。かなり速く刻せて関東勢からは速刻と言

われたが自覚はなく、出来てみれば馬字を逆布字。刻し直す羽目になってしまった。皆思い思いのオマージュを込めて作品は完成。しばし鑑賞の後、懇親会となった。岡野楠亭先生が駆けつけて下さり、席上揮毫など盛り上がり、二次会では日本の篆刻の今後とか様々な話題が出て、本当に有意義な時間を過ごさせてもらった。

新井光風先生の講演を前にお手伝いすべく早めに会場入り。演題を張り付けた後、受付。協会の面々、先生方も三々五々到着され参加総数一八五人の盛会となった。

講演のテーマである戦国期の竹簡は近年発掘が続き資料が充実してきて見方が変わってきている、その最前線が紹介された。驚きは隷書で起きたとされてきた草書への変遷がずっと早い段階、戦国期にすでに起きる字形の変化が長い蓄積の中で起きていることである。何度も早書

きの影響で字形は変化を繰り返し、点が繋がったり左右払いの変化が起きたり、隷書への準備も同時に進んでいた。中には草書へのダイレクトな変遷を遂げるものもあり、竹簡の狭さが字形に影響したり、雑に書いたことが響いたり、戦国期の篆書はもつと変化の少ないものという認識だったが眼から鱗がぼろぼろ落ちる痛快さであった。篆書作品を専門にされている新井先生の鋭い視点を聴衆も納得の講演であった。

場所をクルーズクルーズ THE GINZA に移しての懇親会は総勢一一五人が参加して、綿引滔天先生の司会で始まり新井先生を囲んでの和やかな会となった。普段中々話の出ない関東勢とあいさつなど出来てまた話に花が咲いた。次の開催は関西、当協会が準備するという

(嵯峨洛山)



スライドを使って講演する新井光風先生



ステージに並ぶ西冷印社幹部役員・来賓

西冷印社建社一一五年 慶祝大会に参加

平成三十年十一月十三日の西冷印社建社二五年慶祝大会に参加するため、日本篆刻家協会からも訪中団が結成される。西冷印社名誉理事の山下方亭常任顧問・尾崎蒼石会長、西冷印社名誉社員の井谷五雲理事長・多田龍淵副理事長・小朴圃代表理事。他に、黒田玉洲代表理事、奥田農生常務理事、中村葉舟常務理事、出田塘葭常務理事、松本帥風理事、射場少監理事、岸村爽風理事、畑間青露理事の計十三人で慶祝大会に参加する。

十一月十一日(第一日)

朝九時十五分関西空港よりCA163便にて、上海浦東空港に向けて出発。上海浦東空港で通訳、ガイドの朱金良氏と合流。バスで杭州に向かう。あいにく、その日は、習近平国家主席が杭州での輸入品博覧会に出席のため道路規制があり、また渋滞とも重なり、杭州まで三時間以上かかる。その後、夕食までの二時間ほど河坊街にて、文房四宝、おみやげ等の買い物を楽しむ。

夕食は私達が宿泊する浙江国際大酒店で、陳介祺研究会会長の陳新先生のご招待を受ける。通訳に和田大卿氏も加わり、熱烈な歓迎を受け、友好を深める。

十一月十二日(第二日)

夕食まで二班に分かれて行動。尾崎蒼石会長、井谷五雲理事長、黒田玉洲代表理事は西冷印社会議に出席。

他の十人はバスで朝八時ホテルを出発し、紹興見学に出かける。まず、蘭亭見学。蘭亭は、東晋永和九年(三五三年)三月三日、王羲之と当時の名士たち四十一人がこの地に集まり、曲水の宴を楽しんだ場所である。清流に流されたお酒の入った耳盃が自分の前に止まるまでに即興で詩を作るという宴で、三十七首の詩が詠まれ、王羲之により一編の序文「蘭亭序」が書かれる。

蘭亭は森閑とした山の中にあり、入口の門をくぐると竹林沿いに清涼感漂う小道が続く。小道を抜けると王羲之が可愛がっていたという鶯鳥(ガチョウ)の鳴き声が聞こえ、池に放し飼いにされている。横に「鶯池」の碑亭があり、「鶯」は王羲之が書いた字で、「池」は息子の王献之が書いたとされている。

少し歩を進めると「流觴亭」があり、その前に「曲水の宴」を楽しんだ小川が流れている。字の通り幅の狭い曲がりくねった清流がゆったり流れ、座れそうな石も配されている。一同そこに座り風雅な世界にしばし想いを馳せる。その先には、「御碑亭」がある。八角形の東屋で、中には中国最大の碑「蘭亭御碑」が堂々と建っている。正面は康熙帝(清の第四代皇帝)が一九九三年蘭亭を訪れた際に、蘭亭の美しさに感銘を受け、王羲之の「蘭亭序」の全文

をその場で書したとのことで、それを碑にしたものである。背面には、乾隆帝(清の第六代皇帝)が蘭亭を訪れた時に詠んだ七言律詩「蘭亭即事」が刻されている。

「御碑亭」の脇には、「太」字の碑があり、王献之の書いた「大」の字に王羲之がテンを添えたという。その前には、観光客も水で字を書ける机と筆がいくつもあり、私達も各々字を書いてみる。次に少し歩いて、近年できた「蘭亭書法博物館」に向かう。中に入ると正面の壁に王羲之の書いた「之」の大きな字が一字刻されている。「之」の字は蘭亭序の中に二十字あり、みな別の体を構え、ひとつとして同じものがないということが広く知られている。王羲之、蘭亭序、曲水の宴の資料が列挙され、大変見ごたえがある。中でも、昭和蘭亭の様子が立体的に展示され、参加した人の映像も流れ、梅舒適先生の姿も映しだされ、皆から歓声があがる。

バスで品珍樓に移動して昼食。その後、バスで紹興と杭州の間くらいにあるこの目の二番目の観光地、水郷「安昌古鎮」へ移動。バスを降りると、いきなり軒先から吊り下げられた豚の顔の日干しにびっくり。他に鴨や魚、腸詰が所狭しと吊り下げられている。町は北宋時代から始まったとのこと、江南水郷の典型的な建築も良く保たれ、今でも素朴な生活が息づいている。また人も少なく、まるでその時代にタイムスリップしたような感覚にとらわれる。川には烏篷船と呼ばれる真つ黒な足こぎ舟が行き来し、乗ってみたかったが時間に余裕がなく駆け足観光にならざるをえないのが惜しまれた。

その後、バスで邵芝巖に移動し、筆などの買い物をし、尾崎蒼石会長、井谷五雲理事長、

黒田玉洲代表理事と台流、夕食会場に向かう。この日の夕食は名人名家というお店で、流花齋主人の趙軍氏の招待宴である。孔黎翔先生、徐鋒先生、晋嶋先生、呉蘇偉氏、洪益良氏、朱金良氏と旧知の先生方が一堂に会し、和氣あいあいと乾杯が続く。日本篆刻家協会と中国の篆刻関係の先生方の長年にわたって積み上げられてきた友好の深さを強く感じた夕食懇親会であった。(出田塘霞)

十一月十二日(第二日)

十四時より、之江飯店における副社長会議の終了後、尾崎蒼石会長(西冷印社名誉理事)、井谷五雲理事長(西冷印社名誉社員)から西冷印社二一五年祝慶として寄贈される文物の『贈呈式』が執り行われた。

尾崎会長からは、呉隱金石原拓手巻一点、梅舒適先生の葡萄軸一点、井谷理事長からは方介堪篆書七言聯一対が、西冷印社陳振濂副社長兼秘書長、韓天衡、李剛田、童衍方、龔志南各副社長、王宏伟常務副秘書長、黄鎮中副秘書長へと贈呈され、その確認のために受領目録が渡された。

十五時三十分より十七時三十分まで、之江飯店五階ファンクションルームにて『二〇一八(国際)印社社長サミットフォーラム』に参加。(国際)印社社長からの主題報告に続き、中国国内十一印社社長からの主題報告に続き、交流討論が行われた。発言を希望する参加者が挙手するものであるが、井谷理事長が国外の印社で唯一その機会を得て発言した。「西冷印社一一五周年に対する祝辞に続き日本と中国との交流の歴史を再認識し、後を継ぐ我々が更にその絆を強固なものにする」との固い意志を表明した。

十一月十三日(第三日)

九時より之江飯店五階千人会堂にて『西冷印社建社一一五周年祝慶大会』が行われた。中央政府、行政幹部からの祝辞に続き、山下方亭常任顧問が祝辞を述べた。「梅舒適先生が創立された日本篆刻家協会が永年にわたり西冷印社と続けてきた交流を引き継ぎ、昨年は日中国交正常化四五周年記念、日中平和条約締結四〇周年記念として兵庫県立美術館王子分館(原田の森ギャラリー)で開催した『西冷四君子展』で、篆刻愛好家に西冷印社の名を広め、歴史を伝え大成功を取めたと報告した。また、日本篆刻家協会の若い篆刻家の社員登用の要望と今後も友好交流を続けていく強い決意を述べた。大会閉会后、之江飯店会議センター

玄関前広場に場所を移し、参加者全員による記念撮影を行った。

十四時より浙江展覽館にて、『西冷印社一一五周年社慶大型系列展覧開幕式』に続き、一階では西冷印社社員展鑑賞、二階では各印社単位の作品展(日本篆刻家協会は常務理事以上の作品)の鑑賞を行った。約一時間半の鑑賞の後に、十五時半に会場を後にして上海へ向かった。上海では、旧知の呉蘇偉氏、孔黎翔氏等々杭州の金石関係者と交流を深めた。

十一月十四日(第四日)

最終日。昼食後には空港に向かわないといけない為、早朝よりショッピングに繰り出した。目的は、蔵寶楼と福州路。九月で再開発移転により取り壊しが決まっていると聞いていた豫園商場・蔵寶楼については、未だ営業中との情報を得て勇んで繰り出した。一時間三〇分間という限られた時間ではあったが、各自思いの印材・硯等お宝探しに夢中になった。

その後福州路に移動し、古籍書店を拠点として自由行動の時間となった。紙、筆といった文房四宝を求め、古書や参考資料図書を求める者、印泥が自当の者、磚硯や骨董品を物色する者等々自由に買い物を楽しんだ。

南京路のレストランで中国での最後の食事をすませた後、上海浦東空港よりCA一六三便にて関西国際空港へ無事定刻に到着。訪中団の解団により今回の旅は終了となった。

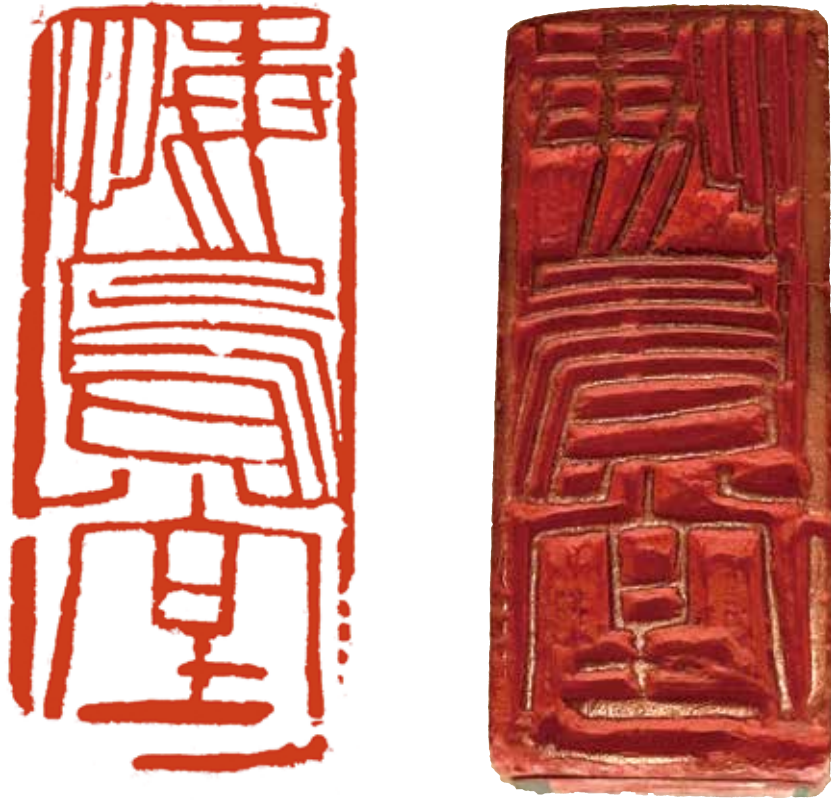
(黒田玉洲)

印社単位作品展の当協会の会場



大会参加者による全員の記念撮影





東京国立博物館で「斉白石展」(二〇一八年一〇月三〇日～二月二五日)が開催されるというので行ってきた。内容については、書・画・篆刻・愛用の文具等多数が出品され、私の知る限り、日本国内における白石展では質量共に最高の展覧会であった。

ラッキーだったのは白石の自刻自用印が出品されていたことである。それも今回取り上げる「悔鳥堂」が出品されていた。材は一般的な青田石で縦八センチ、横三・三センチ、高さ四・二センチと印丈は短い(今回再確認したが白石の自刻自用印の材には良材がほとんど無い)。さてこの「悔鳥堂」は白石自身の日記によると民国二十四年(一九三五)陽曆四月十四日北京にて刻したとある。白石七十三歳。刻は深く線の際はズバリと刻した跡が美しく残る。ただ印面全体を見てみると不思議なことに気づく。線の際に對し、線以外の所は曲のように網の目になっている。言葉は悪いが、このチマチマとした底さらえば、印面から感じる迫力とはかなりのギャップがある。使用していた印刀の展示が無かったのが残念だ。馬國權氏が白石の印刀及び刀法について解説しているので、次号で皆様に紹介したいと思う。

最後に私が以前からこの印に興味があつたのは、「堂」の字で、特にこの土部の一画目がかなり短いことである。今回その謎が解けた。白石の当初の予定ではこの一画目はもう少々長かつたのである。印面を見れば篆刻をやつたことのある方にはわかるであろう。白石がこの一画目に刀を入れた時に線が欠けてしまったのである。白石は「アッ!!」と思つたか否か、最後まで刻し鈴印しこれでよしとしたのであろう。偶然が生んだこの空間が見る人をして感動せしめるのである。七十三歳の代表作であり白石の美意識を教えてくれる一作である。

展覧会成績

改組新第五回日展

入選

井谷五雲 小朴圃
喜多芳邑 古溝幽畦
関踏青 出田塘葭
早川聴芬 稲垣華扇
橋高香流 村田祥鳳
吉田雅風

日本書芸院展
第七十三回日本書芸院展

史邑賞

出田塘葭 田中修文

大賞

北田成磊 嵯峨洛山
西口青咲 畑間青露
山本寿法

特別賞

金井榴華 戸出九廬
中島重陽 平中葭舟
三好和生 水中澄山
安井芳泉 山本龍石
吉田百華

準特別賞

池谷宝樹 石川無外
下倉遙水 中井榮子
中川典子 中本管城
藤澤涼子 松村信夫
山吹縁 山本杏華

青鏡忘詠(十八)

小朴圃

「空谷幽香」



黄牧甫の「空谷幽香」を見ていた。う。豎と横だけの構成で、一見平凡にすぎると見えるかも知れない。がよく見ると、大きな構えの美に悠然とした、堂々たる風格である。見飽きない。なぜだろう、と観ると実に多くの工夫がされていることに気付かされる。構えが大きいのに窮屈さを感じさせないのは、線の細さと相俟って、広い空間によるものだろうが、その線が微妙に揺らいで、水平は実は水平でなく僅かに左右に傾いていたり、或いは波うっているように見えたりして、線状が平行に並んで平凡になるのを防いでい

る。このことは豎線においても同じ。例えは空と幽字の隣接した豎線の間は、僅かに下が狭くなっているし、空の終画の横線と幽の最下部の横線も、単純に水平ではなく、相互に関連しあうがごとく、ゆったりと波うたせてある。字間を詰めて意外性を出すのは、黄の得意とする手法ではあるが、ここでも空と谷は繋がっているように見えて、谷字の中央部分も広く開けている。左行の幽と香の配置も同じである。しかも谷と香の中央部の横線は敢えて同じ高さにしてあり、それが平凡に落ちないのは、前述の僅かに方向

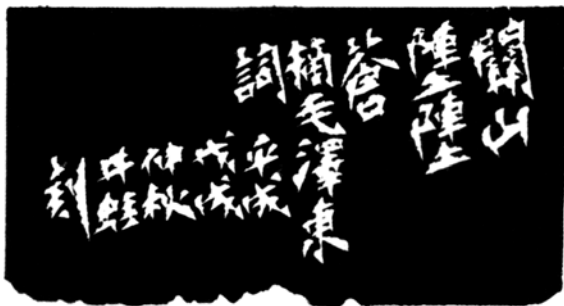
を変えてあることによる。実に心憎いばかりである。印の最下部、谷の口と香の日の高さは敢えて揃えてはいなく、香字は下の辺縁に接するが如くである。と、幽字が左の辺縁に接しきみにしてあることが見えてきた。これも計算のうちか。我々は、面白い印を作るとうとして、つい大きく動かしてしまふものだが、実際に面白くて、見飽きない印というもの、平凡のすぐ隣りにあるものだということが気付かされる。

以上、感ずることの一二を記したが、他は夫々の感性で新発見されたい。

改組 新 第五回日展

特選

真鍋井蛙



第二十五回一隅会展

平成三十年九月二十八日～三十日、アートホール神戸で第二十五回一隅会展が開催される予定であったが、台風二十四号が列島を縦断することによって最終日を待たずして閉幕することになった。

篆刻を中心とした作品に書・画も交え、落ち着いた会場に整然と展示できた。観覧いただいた先輩諸氏から、四半世紀の歳月が経って四人の作家それぞれの個性を表出する作品群であったというコメントもあり少しホッとしたところでもある。次年度以降も更なる発展のため研鑽を積んでいきたい。

生憎の天候であったにも関わらずお越しいただいた皆様には感謝申し上げます。

(古溝幽畦)



第二十一回齊平展



十月六日から八日まで、大阪産業創造館で開催しました。会場をこちらに移して三年目、テーマ展示「和」字印も各教室のカラーが出て、定着しつつあります。また、併催展示は昨年につき、日本印人作品Ⅱ（～江戸後期）を展覧し、好評でした。

さて、本展作品は、かつて「オモチャ箱をひっくり返したような…」と形容されたこともありましたが、作品の内容から装丁の方法まで各自が細部にまでこだわり、完成度の高い作品が多くなった、と思っています。何十年やっている人も、始めて二、三年という方も、齊しく和気あいあいと出来ているのではないかと、勝手に感謝しています。ご高覧ください。多くの方に御礼申し上げます。

(東尾高岳)

日本青年篆刻展

昨年の三月に台湾・国父記念館にて日台青年篆刻交流展が開催された。その際に出品した日本側の作品をもう一度日本で展覧しようという話を持ち上がり、一〇月三日～十一日六日、上野にある日展新会館において「日本青年篆刻展」を開催した。搬入出等は東京の出品者に負担をかけたが、会期中の会場当番には本協会出品者全員が足を運ぶことができた。会期は日展と重なったこともあり、多くの方々に足を運んでいただけた。

三月は台湾の出品者との交流が主にならざるを得ない部分が多く、あまり日本側の出品者と交流する時間がなかった。しかし、今回は日本側の出品者とも大いに交流を深めることができ、とても有意義な機会となった。

三月の日台青年篆刻展にはじまり、今回の日本青年篆刻展に到るまで協会から多大なるご支援に対して出品者一同大変感謝しております。このご恩に報いるためにも今回の展覧



会を通じてできた出品者同士の関係を今後も大切に、協会のために尽力したいと思いますので、お待ちしております。今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願ひ申し上げます。本当に有難うございました。

(稲垣華扇)

デザインとして見る篆刻の展開
不華篆会習作展XXVI

「星」字をデザインして生活の中に書・篆刻・不華篆会習作展XXVIを平成三十年十一月三日～四日の二日間、伊丹市立芸センター、又丹波展として同内容で十一月二十日～十二月二日の十三日間、兵庫県立丹波の森公苑にて開催。

統一額での篆刻作品と工芸的要素を含む「星」字を題材にデザインした作品を各自二点を展示、四半世紀を超え新たなスタートとしての二十六回展、個々創意工夫し、小さな作品の中にそれぞれ思いを込めて制作したものであった。

例年各会期最終日には篆刻一日体験講習会を行っている。参加者は多々いるが、なかなか続けてくださる方がいないのが悩みの種である。

(木村容庸)



第二十七回 篆刻と書 遠邇篆会展

平成三十年十一月十三日(火)～十八日(日)までの六日間、磐田市立中央図書館で開催した。今回は日本篆刻家協会理事長井谷五雲先生に特別出品を依頼した。会員の作品は篆刻二〇点、書四点、刻字四点、机上には「良寛詩分刻」三五点と印材、折帖「學古金石文字」一点を展示した。各人自由なテーマでそれぞれ数点の作品を展示した。

今回、本会会員の名倉氏指導による小中学生作成の雅印一〇〇点を押し展示した。初めての試みであったが、篆刻を楽しんでいる様子を感じられる作品が多々あり心強かった。

日本篆刻家協会会報の外、篆刻の楽しさを伝え、会員の増加につなげたいと、入会案内のパンフレットも用意した。入場者総数は四二〇人であった。
(鷹取千豊)



第十五回 関中篆刻・篆書展

平成三十年十一月十五日(木)～十八日(日) 会期
出品者 四十二人
篆刻四十点、篆書三十七点、封泥五十四点



本展は、隔年におこない十五回を数えました。今回のテーマは、封泥です。封泥は古代中国などで、重要物品を入れた容器などを封緘するために粘土の塊に担当者印を押ししたものです。会員は、押したい印を持ち寄り押印したのち、焼いてもらいました。現代では、あまり見ることがない封泥作りを経験し、皆様に観ていただくことができました。

また、特別陳列として、河西笛洲先生の軸をはじめ、梅舒適先生の軸が飾られ、来場者の関心を集めていました。

展示コーナーには「赤の文具」鶏血石や、印箋などが並べられ、注目を集めていました。

開催四日間の来場者は四五〇人と大変多くの方々に篆刻への関心をもつていただけ会員一同、今後の作品制作に対する意欲を応援していただきたいと思います。
(浅野春泉)

第五回 伍葉展

一月十八日から二十日まで、神戸・元町みなせ画廊に於いて伍葉展を開催致しました。六年前に中国の青田を旅したご縁で結成し、今年で五回展を迎えました。それぞれ違う師匠の元で学ぶ五人が個性を持ち合い日々切磋琢磨して参りました。今回、蒼文篆会の井後、陳介棋の詩、畦石舎の石留は落語や洒落、畦石舎の北田は陶印、斉平印会の東尾は糸印、娯輝文会の稲垣は胤禎十二美人図を題材に作品をまとめました。

協会の会員の皆様をはじめ、SNSなどの繋がりで年々足を運んでくださる方が増え、今年には沖繩からも来ていただき、三日間で約三〇〇人の来場をいただきました。新たな繋がりが広がったことを励みに更なる精進をして参りたいと思っておりますので、今後とも御指導の程宜しくお願い致します。
(稲垣華扇)



〈予告〉

第十二回 日本篆刻家協会 中央研究会

日時 八月三日(土)～
八月五日(月)

場所 シーサイドホテル
「舞子ビラ神戸」

本年は第三十五回日本篆刻展の特別展観受け、特別講義として講師に全日本篆刻連盟理事野中穎僊先生をお招きし「日本の印人」について講演頂こうと計画しております。

また印譜研究・分刻課題、例年通り会員所蔵の文物オークションも企画しておりますので、奮ってご参加いただきますようお願いいたします。

展覧会案内

協会行事

予定

編集後記

▼随風會（山下方亭）
第三四回随風會書法篆刻展

会期 四月一九日～二一日
会場 京都市勸業館みやこめっせ
特別陳列 中国古代青銅器 古銅印譜

報告

▼長修会（田中修文）
第一二回長修会展

会期 一〇月五日～七日
会場 半田市福祉文化会館

▼川平印会（長谷川拓石）
川平印会展

会期 一〇月六日～八日
会場 ギャラリー一書泉

常務理事会

二月〇日（土）
錦城閣

理事会・総会・新年会

二〇一九年二月三日（日）
山代温泉

東西印人交流会

二月二四日（日）
銀座フエニックスプラザ

第三五回日本篆刻展 審査会

二〇一九年三月三日（土）～二四日（日）
兵庫県立美術館 王子分館（原田の森ギャラリー）

第35回 日本篆刻展
特別展 日本の印人
併催 第三回日本篆刻家協会学生展

2019年
5/22(水) ▶ 26(日)
10:00～17:00 (入館 16:30まで)
(最終日は 16:00 終了)

兵庫県立美術館王子分館
(原田の森ギャラリー)
神戸市灘区原田通3丁目8-30
電話(078) 801-1591

主催・問合せ先
日本篆刻家協会
大阪府池田市石橋2丁目2-10
牧野ビル203号
電話(072) 760-3852

後援
兵庫県・兵庫県教育委員会、神戸市・神戸市教育委員会
中国駐大阪総領事館、大阪府日中友好協会
公益財団法人 兵庫県芸術文化協会、神戸新聞社

第三五回日本篆刻展

第三回日本篆刻家協会学生展

五月二二日(水)～二六日(日)

兵庫県立美術館 王子分館(原田の森ギャラリー)

併催 第三回日本篆刻家協会学生展

特別展 日本印人

第三五回日本篆刻展授賞式

五月二五日(土)

A N A クラウンプラザホテル神戸

第十一回日本篆刻家協会役員展

六月二九日(土)～八月一八日(日)

古河篆刻美術館

第十二回中央研究会

八月三日(土)～五日(月)

舞子ヒラ

常務理事会

二月九日(土)

錦城閣

海外交流

日本篆刻家協会選抜当代名家書・篆刻展

八月三日(土)～一週間

山東省濰坊市

日本篆刻家協会の西冷印社名誉理事・
名誉社員展

九月二日(日)～

杭州市 西冷印社

☆「平成」の元号で発行する最後の会報となり。消費税導入でスタートした平成ですが、あなたにとって平成の三十年間はどうな時代だったでしょうか？ある新聞社が読者対象に行った調査（印象に残る平成のニュースや出来事）によると、阪神・淡路大震災、東日本大震災が一位・二位にあげられています。まさしく「災害の時代」を物語っています。昨年も各地で豪雨、地震、台風といった自然災害による甚大な被害があったところです。平成時代は人口減少に伴う少子高齢化の進行、IT社会の到来、グローバル化の進展など社会が大きく変化しました。

☆「昭和」に発足した私たち日本篆刻家協会では、初代理事長梅舒適先生からの伝統のもとに、西冷印社や中国芸術研究院をはじめとする中国との交流を続け、国内でも東西印人交流等新しい事業も展開し、今年三十五周年の節目を迎えます。

☆新しい元号が「令和」に決まりました。この令和には、人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つという意味が込められているということです。書道界だけでなく、一般社会においても篆刻の周知向上が図られるよう、邁進してまいります。

編集：会報部
酒居石荘 木村容庸
戸出九蔵 畑間青露

お気づきのこと、ご意見など、事務所までお寄せください。
MAIL info@n-tenkokujp

FAX 072-760-3853

9

16